令和四年度　後期日程　解答・解説

【五〇分・一〇〇点・配点詳細非公表】

【一】

〈出典Ⅰ〉『にほん語観察ノート』中央公論新社

様々な人や団体の言葉、文章を取り上げ、筆者がそのことについて話していくという形式の作品。読売新聞日曜版に連載されたものをまとめて発行された。

〈出典Ⅱ〉『話し言葉の日本語』小学館

「せりふの時代」に連載されたものに加筆し出版された。戯曲のセリフについて考えていくことで、話し言葉としての日本語を捉えようとする対談集。

〈著者紹介〉

井上ひさし

山形県出身の作家・劇作家。代表作にＮＨＫの連続人形劇『ひょっこりひょうたん島』や『吉里吉里人』がある。

平田オリザ

東京生まれの劇作家、演出家。二〇二一年に芸術文化観光専門職大学の学長に就任。

問一　漢字の読み書き

漢字の学習は読み書きを基本として行っているが、それらに加えて、意味・使い方・（熟語の）構成にも意識を向けて学習しよう。漢字の意味を知っていることは、音訓を含めた読みの能力につながるうえに、初めて見る熟語の意味も推測できるようになってくる。他教科でも、国語でも初めて見る熟語は増えてくる。その際に意味を知っていることが学習者を助けてくれる。また、熟語の構成や漢字の成り立ちからの構成を意識することも同様である。語彙はすべての基本。多く身につけていこう。

問二　接続詞・副詞

接続詞や副詞の呼応について考える問題。これらは説明的文章を読む際にも、自分で書く際にも非常に重要なスキルになる。役割や意味を意識しよう。

《い》は、その直後に「実際には」とあり、理想と現実でのギャップがあったことを示す文になっている。そのため、逆接の接続詞が入る。

《ろ》は前の文章をうけて「沸騰する」を具体例にして、科学の術語が「一語一義」である必要性を述べている。だからここには例示の接続詞が入る。

《は》はドラマドクターが大勢いるという話を受けて、「なかにはヤブもいる」が、基本的なことを教えてくれるという流れの中である。ここでは「ヤブもいる」ということ、全員が優秀ではないことを想定して、反例（反対の例）もあることが当然だが、自分の言いたいことは別にあるという構成で主張を述べている。

問三　文章の図式化

「加藤氏の役割」を、大きいものから小さいものに焦点を絞って整理していく

問題。加藤さんの大目標は①日本サッカーの強化である。そのために取り組んだのが、②指導者の指導に共通性を持たせることで、そのために③用語の統一を行ったのである。この①②③は①の中に②が含まれ、さらにその中に③が含まれるという関係である。これを表しているのはエになる。

問四　一般化と具体例

「用語の統一」は後の具体例にあるように、それぞれの動きに、統一された呼び方をつけることで、皆が理解できるようにすることである。これにあてはまるのはアである。決して、英語を使うことではないので注意しよう。具体例が出てきたときに一般化するトレーニングを積んでいこう。そのことが文章の理解にも物事を的確に考えることにもつながっていく。

問五　知識と文章のつながり

日本語は主に和語・漢語・外来語で構成されている。それぞれの言葉を理解して使い分けることで、より豊かな表現力が身につく。ここではそれぞれの持つ特性と、文章中での使われ方を意識しよう。アの前半部の説明は特に現代では多くみられるが、それらが「一語一義」ではないため不適。イは本文中の内容と合わないため不適。エは和語の特徴として言われる内容ではあるが、本文の内容とは不適。よってウが適当。

問六　因果関係、具体と一般

この文章において、海外との対比を行いつつ日本演劇界について話し合う中で、井上は言語化を日本に足りない点を挙げる。井上は平田との対談で演劇の言葉や構造を話すこと自体が演劇の原則の言語化になっているということに気づくのである。そのため、この対談をまとめることがそのまま教科書になるのである。この内容に適当な選択肢はア。

問七　文の構成

文章Ⅰは加藤久氏の言葉や報知新聞、辞書などを引用し事実を整理しながら「一語一義」を身につけた日本サッカーに期待したいということを述べている。よってアが適当。また、文章Ⅱは井上と平田が演劇というテーマで、特にドラマドクターについて話している。そこから、法則などをまとめた教科書を作りたい、日本でも劇作家大会同様のことがしたいと話を結んでいる。二人は対談しており、それらをまとめて文章にしたというものである。自分の経験などを具体例に、自らの考えを述べあっている。よってエが適当。

問八　要約・具体と一般化

問七の解説にもあるように、Ⅰは「一語一義」にすることによってサッカーが成長したと述べている。Ⅱは演劇の原則をまとめた教科書の作成や、原則が若いうちから身についていること、原則に基づいて話ができることをうらや

んでいる。二つに共通しているのは、言葉にすること、それも意味がきちんと定義されていることの大事さである。これらを国語の学習に落とし込んだ時には、文章の読み方などを原則として言葉にすることとなる。つまり、エが適当になる。そして、このように原則やどう読んでいるかを言語化していくことが国語の学習である。

【二】文学的文章（小説）

〈出典〉「だめなものは」

短編集「ハヅキさんのこと」（講談社新書）に収録されている作品。「ヤマシタさん」の発言によって変化する「わたし」の心情を細やかな描写で描いた作品。

〈著者〉川上弘美

東京都生まれの小説家。一九九六年に『蛇を踏む』で芥川賞受賞。幻想世界と現実世界の入り混じった作品が多い。

問一　口語文法

問題文の「から」は「～以降」の意味を持つ。これと同じものはイ。アは原因・理由、ウは時間の起点、エは対象の起点。普段から助詞の使い方を意識することが、読みにも書きにも良い影響を与える。

問二　語句の意味

「小一時間」は一時間程度、一時間弱のこと。量に続く「強・弱」などは勘違いしやすいのであわせて学習しよう。

問三　場面の描写

デイジーの様子はお洒落に描写されており、マスターも腕が立つが静かな人物として描かれている。この喫茶店の様子の描写は、「わたし」にとって居心地が良いからこそ通い続け、ヤマシタさんともそこで出会うのである。よってイが適当。

問四　表現技法

ものを人に例える擬人法、「ような」を使ってたとえる直喩、使わずたとえる暗喩。いずれも比喩の一種である。そのため「人形のような」は比喩・直喩になる。ここで外面的な特徴を述べることで、その後の印象の部分がより際立つようになる。よってエが適当。

問五　因果関係

「わたし」が読んでいた本は、ヤマシタさんが探していた本だということで本を貸すことになる。「わたし」は良い感想を期待して感想を聞く。しかし、ヤマシタさんが「だめ」と言ったことで「わたし」は頭に血がのぼる、つまり興奮してしまうのである。よって、アが適当。

問六　表現技法

小説の表現は、基本的に無駄なものはなく、一文一文がつながって作品を作っている。そして、景色の描写は人物の心情を反映するものとなっているということを押さえておこう。

アは続く文章での「わたし」の手持ち無沙汰な様子や時間が経過したことを描

写する表現であり、この部分があることで、ヤマシタさんが読むのを待っている「わたし」を自然に描いている。

イはヤマシタさんが本を読み終える直前の描写である。桜が散ることは一つの季節の終わりを感じさせるものであり、「わたし」の創作への動機が激変することを暗示している。よって、イが正答。

ウは初めての会話以降もヤマシタさんとの交流があったものの、個人的なことには踏み込まなかったために当時は知らなかったということを裏付けている。

エはいつまでもヤマシタさんのことが気にかかっていることを示す表現。交流がなくなって、もの書きを再開した現在も、ヤマシタさんの言葉と共にその存在が気にかかっていることを裏付けている。

問七　人物設定と心情変化

小説において、登場人物の人物像を作ること、また、心情変化を捉えることは、より読書を楽しむために重要な要素である。

1について、ヤマシタさんは基本的に印象の薄い、存在感がある人物ではないと描かれている。また、描かれている場面以外では「可もなく不可もない内容を喋る人」「容赦ない言葉を～二度となかった。」とあるように、その話す内容も普段は人物通りの印象の薄い人物である。そのヤマシタさんが初めの会話で「わたし」の好きな詩人を「だめ」と断定してきたのである。この衝撃を押さえたい。よってエが正答。

2について、「わたし」はもの書きに対してそこまで強いこだわりはもっていない。「運が良ければ」程度でしかないのである。そして、そのことでもの書きが「読者にさばかれる」ことを知り、ものを書くことをやめたのである。よって、エが正答。

【三】古典（漢文の連続テクスト読解）

〈出典〉Ⅰ・Ⅱともに

『菜根譚』（前集五八）及び（後集八）

全三五七条、前集と後集に分けられ、全体的に二句や三句の対構造で内容明快簡潔な文章で構成される。明代の成立か。内容の特徴としては、儒・仏・道教を融合した内容で、中国の戦乱の歴史を生き抜く処世訓となっている。日本へは幕末あたり、加賀藩や江戸の昌平坂で刊行され、現代に至るまで実業家やアスリートなどに愛読されている。

著者は洪応明（こうおうめい）、字は自誠、洪自誠とも呼ばれる。生卒も出身も分かっていない。

「菜根」とは宋の汪信民（おうしんみん）が語ったことに由来し、根菜は筋が多く固いが苦にせずよく噛み続ければ真の味を理解できるものの意味がある。また、粗末な食事、あるいはそれを避けず質素な暮らしを心掛ける「清貧」の思想に通じる意味も有している。

問一　訓読の知識と技術（主に返り点）

受験生にまず確認してほしいことが、「白文」「訓点」「訓読（文）（する）」「書き下し文（書き下す）」等の定義の理解と学習語彙の定着である。この学習語彙の定義をきちんと理解して学習を進めないとつまずく場合が多い。「訓点」はさらに「返り点」「送り仮名」「句読点」に分けられるがこちらの定義は理解定着できているか、解答にあたって確認しておいてほしい。

さて、漢文も日本語と同様、縦書きの場合は上から下に読む。また、返り点のうち「レ点」は一字返って読み、「一、二点」は二字以上返って読む場合に用いる。右の理解を基に、受験生は学習の中で訓読の練習を重ね、レ点と一、二点の組み合わせの文の訓読など読み慣れて受験を迎えてほしい。

問二　故事成語の解釈と読解への活用

1「衣冠の盗」とは、衣や冠を身につけた官職に就く者が、君主に尽くすことや租税によって養われているにも関わらず、人民に対し尽くさないことを「盗賊」と非難する語である。国家、君主は（或いはそれに仕える役人は）、国民の血税によって養われているようなものであり、身を戒め、徳を以て人民を愛する必要がある。

さて、これをもとに一文めの解釈をするわけであるが、一文めの前半は易しいが、後半とそのつながりが難解である。よって、二文め（1の解釈）をもとに、全体が対句形式になっていることを踏まえ、対比的に一文めの解釈に取り組む。二文めが「官職に就いて人民を愛さない＝盗賊（給料泥棒）」となるので、一般化すると「手段を得ても本来の目的を果たさないこと＝道理にあっていない」となろうか。これをもとに一文めを解釈すると、本を読むこと（手段）ばかりで、その中から昔の聖人・賢者の志を学ぶ（目的）ことがなければ、ただの「文字に囚われる＝こだわっているだけ」である（道理に外れる）と述べていることがわかる。

問三　比喩の解釈と具体化

問二でみてきたように、一、二文めが読めたら、あとは三、四文め、はたまた、同作品中の[Ⅱ]の前半部分も対比的に読み進めればよい。傍線部③を含む四文めは、起業して資産を残したとしても、後の代や事業への投資を考えなければ、うまくいっているように見える事業も目の前の花のようである、の意味になる。これを一文め～三文めの部分や全体と対比し、後半に「道理に合っていないもの＝意味のないもの」がくると考え、花の美しさの比喩的イメージと合わせて、「見栄えは華やかだが中身はない」ものと考える。ちなみに日本語には「あだ花」という慣用句があり、表は華やかでも中身のないものの意があり、こういった場合に使う語として覚えておきたい。仕事やお金を稼ぐことは単なる手段であるため、目的のない仕事の成功や資産形成は「みせかけだけのもの」と『菜根譚』は批判する。手段と目的とをはき違えてあくせく生き、持たざるを不幸としてはならない。

本来の生きる目的を見失わないようにしたいものである。

問四　本文の趣旨（全体の一般化）

ここまでいくつかの例を読み進めてきたが、Ⅱの最後ではそれらを一般化して解釈をまとめていくよう、つながりを考えながら読みたい。傍線部④は注を参考にしながら、「跡（形に残るもの＝目に見えるもの）を用い、（跡の中心ともいうべき）精神（道理）は用いようとはしない」と分かる。ここまでの内容と合わせて一般化すると、「見えるもの＝手段ばかりを追い求めて、その目的や精神（道理）を求めようとしない」と考えることができるだろう。

問五　口語文法、表現技法、反語の解釈

1は漢字が平仮名になっているもの、「不（ず＝～ない）」と「之（の）」を、現代語（口語文法）の知識と理解をもとに二つのつながりを考えていく。例えばⅡの一行めの「（理）解せず」＝「理解し・ない」を参考に、助動詞だと判断でき、「之」は「琴や書の趣」を参考に、格助詞・連体修飾格の用法であることから助詞と判断できる。助詞や助動詞は付属語。選択肢の中には迷うものもあるだろうが、これは文法を学習するための用語の定義が定着していないことに起因するものであろう。受験生は口語文法の細かな理解や定着が苦手で（というか苦手だからこそ勉強すべきなのだが）、放っておいて高校の学習に入ろうとする人が多い。逃げ出したいところこそ差がつくところ、良薬は口に苦しというように、学習の要となってくるため努めて学ばれたし。

2の諷喩は比喩の仲間で、何かにかこつけて、それとなく（遠まわし）に言いたいことを伝える表現技法。「喩」をもとに比喩の仲間だと分かればよい。傍線部はなじみのある倒置法や体言止めではないため、反語と判断したい。勿論、反語法（表現）をはじめから知っているのが望ましいが、この機会に学んでほしい。

3反語（法）表現は疑問のかたちをとり、反対の意思を示す表現方法。これをもとに4では反語の使用例を選ぶ。

問六　本文の構成展開、表現の特徴

漢文は対を多用する文体であり、今回の二つの文章も例外ではない。さて、この対（句）であるが、漢詩文で「対句」と判断してよい条件としては、①構成、②意味、③品詞の対応が挙げられる。Ⅰは一見漢詩（韻文）にも見えるような四文であるが、その構成は全体が対句形式となっており、一文の構成としては内容と漢字の組み合わせに注目すると二字・二字・二字・四字になっていることも分かる。Ⅱの前半は対句形式ではあるが、Ⅰとは一文内の構成は異なっている。対句の後、本文の趣旨について、反語を用いて強調して終える。この強調している内容も問五までの部分と全体、具体的内容と一般的内容を踏まえながら正しいものを選びたい。

【書き下し文】

Ⅰ

書を読みて聖賢を見ざれば、鉛槧の傭為り。

官に居て子民を愛さざれば、衣冠の盗為り。

学を講じて躬行を尚ばざれば、口頭の禅為り。

業を立てて種徳を思はざれば、眼前の花為り。

Ⅱ

人有字の書を読むを解して、無字の書を読むを解せず。有絃の琴を知りて、無絃の琴を弾ずるを知らず。迹を以て用ひ、神を以て用ひず、何を以て琴書の趣を得ん。

【現代語訳】

Ⅰ

書物を読んで聖人賢者（の行いを）見習わなければ、文字の奴隷となってしまう。

官職にいながら民を愛さなければ給料泥棒である。

学問を講義して実践を大切にしなければ、無意味な問答である。

事業を起しても未来への投資を考えなければ意味のないものである。

Ⅱ

人は字の書いてある書を読んで理解するが、字のない書（字の指し示す本質的内容）を読むことを理解していない。弦のある琴（の弾き方）は知っているが、弦のない琴を弾くこと（琴を奏でる趣き）は知らない。形あるものばかりに気を取られ、精神をはたらかせることを忘れていては、どうして琴を弾き書を読むことの本質を会得できようか、いやできはしない。